

宮原英夫(監修)

『理学療法学生のための 症例レポートの書き方』

内山 靖

(群馬大学医学部保健学科)

このたび、北里大学医療衛生学部の開設当初から理学療法学科で教鞭をとられてきた宮原英夫博士の監修により、『理学療法学生のための症例レポートの書き方』が朝倉書店から出版されました。

本書を世に出された背景には、3つの動機があるように感じられます。第1には、臨床実習で体験した症例のレジュメやレポートの作成に役立つ平易な具体例を示すことです。第2には、理学療法を科学的に進めるための minimum requirements としての臨床記録のまとめ方を提示しようとしたことです。そして、第3には、理学療法を専門としない教員のお立場から、学生が楽しく理学療法を学修するための支援とともに、今後の理学療法に重要な道標を示されようとしたことです。なお、3番目の動機は、本書に明記されているわけではありませんが、評者が感じた点であり、事実とは異なるかもしれません。

宮原博士は、東京大学物療内科のご出身で、リハビリテーション医学の科学的基礎となる物理医学の専門家であり、循環器内科の臨床医であるとともに医学統計学に精通されています。1995年に朝倉書店から出版された『医学統計学ハンドブック』は、多くの医学研究者に愛用されています。このような科学者が、理学療法の将来を見据えた寛容な姿で、少しずつエビデンスを積み重ねる姿勢を具体的に促していただけることは、学生のみならず理学療法学の構築を目指す者にとって大変有意義なことです。

本書は、北里大学を卒業された4名の若い理学療法士によって執筆されています。彼女らが学生時代に体験したことや臨床実習に対する思いが散りばめられており、後輩に伝えておきたいメッセージとしての意味合いが含まれているように感じます。内容は、付録の用語集を含めても150ページ強と比較的コンパクトにまとめられています。構成としては、まず総論で、“この本の目的、内容と利用法”に触れられた後に、“臨床

実習の流れと症例レポートの役割”、“症例レポート作成の手引”、“事故の予防と処理(リスク管理)”について記載されています。続いて、各論では症例レポートの実際として、臨床実習でしばしば遭遇するであろう8症例が取りあげられています。具体的には、変形性股関節症術後、大腿骨頸部骨折術後、脳梗塞による左片麻痺、全失語を伴う右片麻痺、小脳橋角部腫瘍摘出術後、動脈閉塞による大腿切断、急性心筋梗塞です。これらは、病態、障害、予想される経過とリスクが異なり、厳選された中でより多くのことを相互比較的にも学修できるように工夫されています。なお、それぞれは、A:レジュメ、B:レポート、C:解説の順で統一されています。一方、各症例レポートの下位項目はそれぞれで異なっており、あえて統一されていない点は疾患や病態による特徴を浮き彫りにするとともに、内容を重視して形式に対する一定の許容範囲を示しているものと思われます。学生への課題は、ともすると形式や体裁のみが重視されてしまう場合がありますが、臨床での個性性と独創性が本質であることを毅然と示されているように感じました。

本書は、学生にとっては、学生が書いた等身大のレポートゆえにすぐに参考になります。時としてあまりに優れた見本は理想を示すことはできますが現実的な手本となりにくい場合があります。また、臨床実習指導者や教員にとっては、学生の到達レベルの確認とともに誤解しやすい項目や支援が必要な内容を見分けるのに貴重な資料となるでしょう。

惜しむらくは、序文にも書かれているように平成10年に思いたたれてから6年の歳月が過ぎているため、現在の国際生活機能分類による障害構造の整理がなされていません。また、文中に“訓練”の語が氾濫しており、これについては適切な用語に修正する必要があります。

このように、本書は、学生には極めて多くの点で現実的な参考になるとともに、臨床実習指導者や教員にとっても具体的な目標を設定して学修を支援するために有用な一冊になるものと思います。

●B5判 152頁

定価(本体 3,200円+税)

2004年 朝倉書店・刊